初夏のワルツ

若葉の緑まぶしくて
ひときわ深く息づいている
光は若葉にそれぞれ
音符のように降り注いでいる

静かなワルツを踊る
木の枝たくさんついてる
足元その影映す
緑の妖精たち

胸の奥の古い記憶さえ
ここに触れると明るくなる

初夏の光が真っ直ぐに
風と共に若葉めがけ
光が若葉に当たると
跳ね返して裏側チラリと

やさしくステップ踏んで
木の枝少しだけ揺らす
季節のリズムを描く
緑の妖精たち

色をなくした古い記憶さえ
ここに触れると取り戻す

静かなワルツを踊る
木の枝たくさんついてる
足元その影映す
緑の妖精たち

胸の奥の古い記憶さえ
ここに触れると明るくなる

やさしい雨

朝の道で静かな雫
薄い光に白く光ってる
月曜日のこれから始まる
期待と不安抱えて

雨粒　風に流されてくる
ひんやり伝わる傘持つ手に
消えないでまだ残ってる
胸の奥洗い流すように

やさしい雨　ゆっくりと
かすかな音でささやいてる

「今日もあなたはそのままでいい」
踏み出す足音に重なる

舗道流れる水の筋が
揺れる心　映し出してる
新生活の慣れない春先
期待と不安抱えて

やさしい雨　少しずつ
よくなる気配ささやいてる

「確かな未来向かっている」
踏み出す足元に一歩ずつ

やさしい雨　ゆっくりと
かすかな音でささやいてる

「今日もあなたはそのままでいい」
踏み出す足音に重なる

風信子

いつの日か知らない間に
花びらたくさん　しっかりと
庭の隅　庭園灯の前
足元いろどり明るく

気にしなければ
気づかないほど
背丈も低く目立たない

誰かに見せるのでなく
褒められるためでもない
ただ今日という日を
まっすぐ生きてゆくために

風信子　静かに咲く
花びら模型のようしっかりと
高い木の揺れる葉の下で
少しも動かない強さで

土の下　拾い集めてきたあたたかさ
花に変えてゆく

誰かに媚びるのでなく
認められるためでもない
ただ確かにやさしく
そっと息をするために

まっすぐ生きてゆくために

シームレス

その一筋の光があるだけで

夜と朝をつなぐあいだに
まだ冷たい影ひそんでる
息ひそめた光　暗闇の端に寄り添ったまま

忘れたはずの痛みが
ゆっくりと目を覚ましてきては
わけのわからない重さ
胸の奥へそっと落としてゆく

やがて影は闇の中で少し柔らかくなって
境目もわからないまま静かに溶けてゆく
かすかな光が一本だけ
呼びかけることもなく
照らしてくれることもなく
消えそうな細さで

その一筋の光があるだけで

どこから始まり終わるのか
知るすべもなくなってきては
悲しみと偽善が
ゆっくり溶け合って一つになってゆく

やがて影は闇の中で少し柔らかくなって
境目もわからないまま静かに溶けてゆく
かすかな光が一本だけ
呼びかけることもなく
照らしてくれることもなく
消えそうな細さで

Woo

深い影の裂け目の中さわれば消えそうな
細い光がサッと照らし静かに流れてゆく
それは儚さ残しながら折れない芯を宿し
そっと語りかけてくるように
確かに押し返す

その一筋の光があるだけで
まだ歩いて行ける　ゆっくり行けばいい

また動き始める

どんなにため息　出したことだろう
立ち止まり　振り返り
動きも止まる
疲れた心に体もこわばり
自分らしくいられない
無理がたたり

すこし休まると　気を取り直して
自分の心に気づきを感じて

どうでもいいこと　考えてしまい
立ち止まっても　仕方ない
また動き始める
演じてばかりが疲れる原因
そんなことするよりも
素直でありたい

時には何もかも　全て消去して
新たな生活もいいかもしれない

ダム

見下ろす湖面に
潜む静けさ
揺れきれないほど
重たい青色

その昔の村の面影が
水の底からそっと浮き上がってくる

まばたきも忘れて
声もここでは潜めて

残った自然の山の景色
沈んだ上の静かな湖面
今ここで同じ呼吸で
守られている

深い谷間に
一つの静けさ
風に吹かれても
動じない青色

閉じ込められた昔の人の笑い声
水の底からそっと湧き上がってくる

あなたの胸の中
声もここに聞こえて

堰き止められた悲しみだけでなく
そっと抱きしめられてる願いも
今ここで同じ形で
たたずんでいる

何のために歌うのか

胸の奥のまだ出てこない
大切な想いにふれる
今日もひとり音も出せない
声も出せないところで

誰かの片隅でも
微かなあかりに
それだけでも歌を作る
意味わかってゆく

歌を作ってくのは
強くなるためでなく
弱さ抱いて歩くためのような気がする
そしていつの日にか
悲しく忘れたい記憶も
綺麗なものにするためのような気がする

ビルの奥の防音室で
一人で声を張り上げる
今日もわずかな時間の中で
ただひたすらに思い切り

動かない空気の中で
こぼれてゆく声
それだけでも歌を歌う
喜びを知る

歌を歌ってくのは
強くなるためでなく
弱さ抱いて歩くためのような気がする
そしていつの日にか
悲しく忘れたい記憶も
綺麗なものにするためのような気がする